

新 刊 紹 介

コペルニクスと現代

湯川 秀 樹 ほか 著

(時事通信社, B 6 判 ix+292頁, 700円)

コペルニクスが生まれて 500 年の記念日にあたる 1973 年 2 月 19 日 (月), 東京都港区六本木の日本学術会議講堂で記念シンポジウムが開かれた。本書の前半は当日の講演内容であり, 後半には評伝「コペルニクス——学者にして市民——」(マリアヌス・ビスクップ, イェジー・ドブジツキ) および付録としてコペルニクスの「貨幣論」(牧野純夫訳・解説)が収められ, 福島要一氏のあとがきでしめくくられている。

最初の講演は, 元東京天文台長広瀬秀雄氏の「コペルニクスとその後の宇宙観」である。コペルニクスの略伝を述べながら, 中世の宇宙観とコペルニクスのそれについてやさしく, しかし詳しい内容にも立入って解説している。そうしてコペルニクスの近代天文学に対する大きな貢献は, ケプラー, ニュートンへとつづく力学の発展をもたらしたことだけでなく, 恒星の視差を検出する努力を通して天文学者の眼を恒星界に注がせるようにした点にある, と結んでいる。

次の講演は元東京理科大学教授矢島祐利氏の「日本におけるコペルニクス」で, 日本人がいつごろコペルニクスの名を知ったか, コペルニクスの学説にどう反応したかをあつかっている。本木良永が 1774 年に訳した「天地二球用法」にはじめてコペルニクスの名前がでてくることから説きおこし, 江戸時代の科学者達や仏教界の受けとめ方について史料をあげて述べている。

第三の講演はワルシャワ大学理論物理学研究所長ユーゼフ・ヴェルレ氏の「物理学におけるコペルニクスの示唆」と題するもので, コペルニクスの提起した諸問題が近代物理学の発展を刺激してきたことを強調している。

最後の講演は湯川秀樹氏の「コペルニクスと現代」で, 現代の科学者はコペルニクスから何を学ぶことができるかを論じている。コペルニクス精神は, 天体の運動に簡単な規則性があるという信念を持つことで, 現在, 素粒子の世界を見ると複雑さを増しているが, ここでも何かある単純さを発見しなければならない, と強調し, 現代においてはコペルニクスの転回——発想の転換が, (物理学においてだけではなく, 広く考えて) 必要であると結んでいる。

評伝は, ポーランドにおけるコペルニクス研究のまとまった紹介としては, わが国最初のものといってよいだろう。同国のコペルニクス研究は, 僧団関係の公文書としていろいろ残されてはいるものの, 伝記の材料として

は役に立てにくい資料をたんねんに分析するなど詳細を極めており, この論文はその一端をのぞかせてくれる。

ヴァルミア僧団領地の長官としての経験から書かれた通貨問題に関する論文の一つが付録の「貨幣論」で, グレシャムの法則をグレシャムより約 30 年前に言ったものとして注目される。

ポーランドの地名や人名が, ポーランド語での呼び方にしてあるのはよいことだと思うが, ミコライ (ミコワイの方がよいだろう), クラコフ (クラクフ) のように中途半端なのはおしい。(平山智啓)

雑 報

6 月 30 日皆既日食の時の新天体について

DOSSIN HECK OBJECT DOSSIN HECK 19501 30630 54167 06520 20521 04980 36319 32021 BRIGHT OBJECT DETECTED ON TWENTY PLATES OF TWO CAMERAS DURING SOLAR ECLIPSE IN KENYA SWINGS MARSDEN. という天文電報が東京天文台へ舞い込んだのは, 6 月 30 日の日食も終り, 観測者がそろそろ帰国した 7 月 11 日のことであった。天文台のロビーに掲示したところ OBJECT の文字から新星だとか超新星であろうかとかまたは彗星かも知れないという憶測が流れた。この電報は例により国内の関係国立機関に流されたところ, 夜になって現地に出かけた人による情報が, 各地から入って来始めた。それによるとその天体を確認した人はだれもいないようであったが, 人間の心理の常として, “そういわれれば何かあったような気もする” “金星, 水星は確認したが, 他にも何かあったようである” という情報まで飛びこんで来た。一方天文台では K 氏が M 氏をつかまえてさかんに “ラジオで観測しろ” とあおり立てているが M 氏は “この観測には最もふさわしくない検出器しか今は装着していないので” といって, 態よく逃げを打っていた。そうこうするうちに国内から現地に出かけた人によって撮影された写真が現像ざれたらしく, 何箇所かから “写野の外でした” という連絡が入って来た。その内の 1 人で長野県諏訪の藤森賢一氏が写した写真にその星野が含まれることがわかり早速調査した。また東京在住の木村精二氏も撮影されていることがわかり同じように調べさせて頂いた。両氏共ケニアのエイリー・スプリングで, DOSSIN・HECK とほとんど同時に写したものであった。藤森氏の写真では, $\alpha, \beta, \iota, \varepsilon, \gamma Gem, \alpha, \beta CM_i, \alpha Ori, \varepsilon Mon$ の各星, 木村氏の写真では $\alpha, \beta, \gamma Gem$ と βCM_i を確認でき, DOSSIN・HECK の天体があるという場所も確認できたが, その場所には -2 等はおろか +2 等級に相当する天体の像は見つけることはできなかった。

(香西洋樹)